

情報化社会における新たな触覚の哲学的考察

Philosophical consideration of the new sense of touch in the information-oriented society

霜山博也*¹

Hiroya Shimoyama

*¹名古屋芸術大学 Nagoya University Of Arts

要旨: 本研究では現代情報化社会における「触覚」のあり方について、さまざまな哲学、テクノロジー（メディア）の変化を考察しつつ、現代のメディア状況における新たな触覚について哲学的に考察するのが狙いである。

キーワード: 触覚, メディア, テクノロジー, 情報化社会の身体, 超越論的経験論

Abstract: This study examines various technological changes in the modern information society. It aims to philosophically consider the new sense of touch in the information-oriented society of human experience.

Keywords: sense of touch, medium, technology, the body in the information-oriented society, transcendental empiricism

1. はじめに—身体感覚の経験の条件とは?—

本研究では、現代情報化社会における「触覚」のあり方について哲学的に考察する。人間には感覚として五感（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚）があるが、哲学や美学の伝統において、それらは上級と下級へと区別されてきた。そもそも、プラトンはイデア論において肉体における感覚を批判するのであり、事物の真なる形姿（イデア）は肉体の目ではなく、魂の眼によって把握される（超越的なものを視る眼）。それに対して、超越的なものに頼らず、人間における経験の条件を思索によって探求する超越論哲学を創始したカントは、認識能力を上級と下級に区別する。肉体に由来して外的なものに触発されるだけの感性的認識能力（感性、構想力）は思惟するものではない。経験の条件を人間の諸能力に求めるカントは、知性的な認識能力（悟性、判断力、理性）によってこそ諸能力による超越論的主観性が触発され、その限界が吟味され、さまざまな場面での関係性がそのつど探求されていくとする。

美学の伝統において、美に関わるのは高級感覚とされる視覚と聴覚であり、低級感覚とされる味覚、嗅覚、触覚は美に関わらないとされる。たしかに、絵画や音楽などの芸術作品を鑑賞するのは視覚や聴覚であり、（一部の現代アートの試みを除いて）低級感覚においては自分が満足できるかどうかの快／不快や、心地よさなどが判断されるに過ぎない。そこには思惟などな

く本能的なものに留まる（「これは美しい」と言うとき、われわれは単に「これは好ましい」と言っているのではない[ドゥルーズ, 2008, p.100]）。カントもこの文脈から『判断力批判』において美を考察する。「これはよい」という判断はどのような「よさ」なのであろうか。例えば、映画や小説で神や幽霊、復活などの宗教的モチーフが出てきた場合、科学至上主義の者は「良くない」と判断するであろう。この者にとっては、科学的な作品こそが「良い」のであって、それに反するものは「悪い」のである。他にも、政治的関心の強い者は自分の政治的立場だけに合う作品を「善い」と判断するのであり、道徳的関心の強い者は自分の道徳観に合う作品を同じく「善い」と判断するだろう。

ところで、この「良さ」と「善さ」は作品の美的な「よさ」と関係があるのか。彼らの判断は自分の関心を満たせたから「良い／善い」のであって、その作品自体について判断をしている訳ではない。このタイプの判断は、あらかじめ満たしたい関心があり、その関心を満たせるものに飛びつき（近すぎる）、満たせないものは拒絶や無視をする（遠すぎる）。理論的な「良さ」、道徳的な「善さ」と美的な「よさ」は異なるのであり、純粋に作品を鑑賞するためには適切な距離を取り、真・善・美を区別して、作品自体の美的な「よさ」を判断しなければいけない。したがって、その判断は何を描いて

いるかの「内容」についての判断ではなく、どのように描いているかの「形式」に対する判断となる。テーマやモチーフについては、それぞれの好ましさや正しさがあるが、どのように描くかについて答えなどなく、適切に距離を取って新奇性や創造性を判断しなければいけない（カントは美の由来を超越論的主観性に求める。あらかじめの概念を当てはめるための判断ではなく、そこから諸能力が自由となったことの快＝美。「諸能力間の、それ自体で自由で無規定な一致[ドゥルーズ, 2008, p.101]」）。カントが低級感覚とされる味覚、嗅覚、触覚を劣位とするのは、これらの感覚が発生する条件は距離がないことだからである。距離が0ならば美的な趣味判断はできず、ただ対象を享受するしかない。

触覚は対象物へ直に触れることで、対象からスペースやザラザラなどの感覚を得ることができる。味覚の場合は、舌の味蕾に飲食物が触れることで、辛さや甘さ、旨味などの味の感覚が得られる。さらに、嗅覚の場合もそうであり、対象物の匂いの分子が鼻の嗅覚受容体を刺激することで匂いの感覚が得られるのだ。したがって、距離が取れないので、思惟の対象にはならないということになる。それに対して、視覚と聴覚は、見ているものと音を発するものと距離があり、思惟の対象となる。これが高級感覚と低級感覚に区別される理由であるが本当なのだろうか。ここでは、美的な認識の対象なのかというカント的な問いではなく、身体における感覚という経験の条件とは何か、という身体感覚への超越論的な問いを提起してみよう。

感覚器官に触れているのは、視覚の場合は光で、聴覚の場合は音波である。カレーから反射された光が眼に入ることによってカレーが見えるし、煮立ったカレーによって振動させられた空気の波が耳に入ることによってその音が聞こえる。視覚や聴覚の場合、感覚器官は対象そのもの（カレー）には触れていないが、対象と触れた別物（反射光や音波）と感覚器官が触れることで、対象についての情報が得られている。光や音波といった媒介を利用することで、視覚や聴覚は知覚者から離れたところにある対象を捉えることができるのだ[源河, p.7]。

このような視点から考えれば、結局のところ五感すべての発生条件は距離がないことであり、眼に反射光が触れ、耳の鼓膜に音波が触れ、舌の味蕾に飲食物が触れ、匂いの分子が嗅覚受容体に触れることによって、それぞれの感覚が生じる。あらゆる感覚を支えているのは「触れる」こと、触覚だったのである。

哲学や美学の伝統においては思惟することが優先され、低級感覚は貶められ、カントは美を超越論的に問い、その経験の条件を諸能力の自由な一致による快に見いだした。しかしながら、カントが軽んじた身体における感覚という経験の条件とは何か、という身体感覚への超越論的な問いを提起してみるならば、そもそも哲学や美学の思惟の構造が低級感覚の触覚によって陰で支えられていたことになる。知性的な思惟という構造は低級感覚と「触れる」ことを排除することで、その構造を維持するものとして包摂していたのであり（排除＝包摂）、「触れる」ことが背後で働くことによって可能となっていたのだ。このような問いのあり方を変える「脱構築[déconstruction]」は経験の条件を明らかにすることで、前述した例のように「触れる」ことをやがて感覚可能にしてくれる。このようなさまざまな時代や地域における、経験の条件を超越論的に問う哲学は「超越論的经验論[empirisme transcendantal]」と呼ばれるが、情報化社会における経験の条件や、「触れること」と触覚はどのようなになっているのだろうか。

2. 「触れること」に含まれる偽の他者性

二元論への批判としてこの触れることを、超越論的に問うたのがメルロ＝ポンティであるが、その問いは純粋に超越論的な問いになっているだろうか。

私の手における触れるものと触れられるものとのこの交叉…私の右手が物に触れようとしている私の左手に触れるときの、触覚についての真の触覚がそれであり、この最後のものによって「触れる主体」が触れられるものの地位に移り、物の間に降りてくることになり、その結果、触覚は世界のただなかで、いわば物のなかで起こるようになる[メルロ＝ポンティ, pp.185-186]。

物に「触れる」左手は、その場合、主体であり、「触れられている」物は対象である。しかしながら、その

左手を右手によって「触れる」ならば、主体だったはずの左手は「触れられている」対象になってしまう。こうして、左手は「触れるもの」にも「触れられるもの」にもなり、主体でもあり対象でもあるのだ。したがって、決して一方では終わらないことになる。次に握手という行為について考えてみよう。握手の成立条件とはお互いが相手のことを思って同じように手を握り合うことである。片方だけ、渾身の力を込めて握ってしまえばそれは「嫌がらせ」であるし、片方が嫌そうに身を反らしながら軽く握るだけならば握手にはならない。自分と他人の握手においては、どちらも主体と対象であり、能動と受動は入れ替わり、「する」と「される」、「触れる」と「触れられる」は容易に逆転することになる。したがって、二元論のようにどちらかは区別できず、「可逆性[reversibilité]」、「両義性[ambiguïté]」が存在している。

それならば、さまざまな物に触れる場合はどうか。一般的には物は物であり、意志などなく、一方的な行為の対象物にしかならない。だが、「アフォーダンス[affordance]」理論によるならばそうではない。「アフォーダンス」はAfford(与える、もたらす)という動詞を名詞形にした造語であるが、環境にある物が人間の知覚や行為をうながす契機を持っていると考える。つまり物(道具)は、「それをどのように使えばいいのか」という情報を人間に対して発しており、その助けを借りて人間は行為をしているとされる。例えば、コップならばどこを持っていいのか、ドアをどのように開ければいいかをドアノブは教えてくれているのだ。「アフォーダンス」はデザイン理論にもなっており、デザインする者はその道具の使い方が見ただけでわかるようにデザインすべきだとされる。こうして、人間が一方的に道具を使って行為をするのではなく、物の助けを借りて行為をしている側面もあることがわかる。したがって、この世界は二元論で分けることができず、主体と対象、能動と受動、「する」と「される」、「触れる」と「触れられる」の「交叉交換(キアスム[Chiasme])」から成り立っていることになるのだ。

この「交叉交換」はさらに大きくなる。人間は人間の五感によってしか世界にある存在者と事物を知覚できない。それに対して、他の動物、生物、植物、物はそれらの感覚器官や「交叉交換」によって、人間とは異なった知覚を世界に存在させている。犬は人間よりも何万倍もの嗅覚をしているし、ルクスキュルが『生物から見た世界』で示したように、それぞれの生き物によって世界の見方は異なる。したがって、人間、動物、植物、物はたがいに触れ合うことで「感覚」を形

成しており、人間が知らない、生み出せない感覚が世界には存在し、可能な現象的身体すべてが生み出す感覚を総合すると、それは「可能性、潜在性であり、物の肉なのである。[メルロ＝ポンティ, p.184]

肉の定義をなす転換可能性は、他の諸領域にもあり、そしてその転換可能性は他の諸領域では比べようもなくもっと軽やかであり、諸身体の間、見えるものの循環を今度は単に拡大するだけではなく、それを決定的に超えるような関係をとって結ぶことさえできるのである[メルロ＝ポンティ, p.200]。

こうして二元論がただ単に批判されるだけではなく、「肉[chair]」の存在論として、存在者は可視と不可視の「交叉交換」に晒されていることになる。しかしながら、そこにはどんな他者性があるだろうか。例えば、言語の一樣態であり、言葉の表現にすぎない「する／される」の中動態を、あまりにも論理的に飛躍させてありとあらゆる者と物の中間領域の存在を主張する論者たちがいる。彼らはその中間領域の存在を示唆するだけで、それがどのように二元論を壊し、転換させているのかを具体的に説明することはない。メルロ＝ポンティは現象的身体の複雑な関係性による感覚を「肉」と呼んだが、中間論者はあまりにも複雑で、近隣や遠接の因果もあり、時制すらも組み合わせさせた関係性を「中動態」にしてしまう。

メルロ＝ポンティにしる、中間論者にしる共通しているのはつねに《私》は維持されており、ただほんの少しだけ「する／される」の関係性や変化に巻き込まれるに過ぎないことである。そこには、絶対的な他者などおらず、まるで自分の鏡写しのような、ほんの少しだけ自分を変える「可能性がある(この可能性はすべて検討されることなく得意げに示唆されるだけ)」に過ぎない他者にすぎない。後述するように自分を変化させるような真の他者は、ある意味では残酷な出来事として《私》を変え別の自己と触れ合うことになる。しかしながら、やはり中間論者の伊藤亜紗は触覚が道徳を超える倫理であると以下のように主張する。

触覚は誘惑的で、不埒な感覚です。触覚は社会的に許されないような行為へと、人を誘い込むことさえあります。「思わずさわりたくなってしまった」という欲望は、見ず知らずの人の体にさわっていい理由にはなりません。「どうしても打ち負かしたくなってしまった」という衝動にまかせて暴力をふるっ

てしまったら、いたるところで殴り合いの喧嘩が起ころうでしょう。こうしたふるまいは、端的に言って道徳に反する行いです。…倫理は、さまざまな可能性を探りながら、行為を選びとることに関わります。触覚のもつ誘惑する力。それは、道徳をゆさぶる力です。「〇〇すべし」という命令を素直に実行できるほど、この状況が純粹で、単純でないことに気づいてしまった。…触覚が持っているのは、道徳を押し付けてくる規範を相対化する力です。…倫理とは創造的なものです[伊藤, pp.198-200]。

ここで問題となるのは、カントを批判するふりをして似たことを言っていることだ。カントは「仮言命法」と「定言命法」を区別した。「仮言命法」は「もし〜だったならば〜しなさい」という形でその場ですべき義務を教えてくれるものである。それに対して、「定言命法」はただ「〇〇すべし」という形で、「あなたは、普遍的法則となることを同時に意志できるような格率によってのみ行動しなさい」、「他者を手段としてのみならず、目的としても扱いなさい」として、「答えない義務」をわれわれに課す。それは、いつ、どこでも、どんな状況でも通じる道徳的行為なのか、他人を道具として利用するものになっていないか、とつねにさまざまな状況において問うことを課し創造的な行為をさせる。カントの義務論は《私》を決して許してくれないが（自律）、伊藤の他律的触覚は「別の自分もきつとあるよ」と甘い誘惑で許してくれるのだ。

「触覚」が持つ倫理性や他者性を、カントを批判するようで全く似たことを中間的なものの言説へと還元することを許してはならない。中間論者の誤りは、メルロ＝ポンティの超越論的な問いを、具体的な説明もできない経験的なものに還元したことである（願望という変化の可能性…）。しかしながら、メルロ＝ポンティの超越論的な問いもまた誤りであり、経験的な「触れること」からまさに鏡写しのように、存在論の「触れること」を考えている。あくまで、少しの変化をする《私》を基準にして、経験の条件を存在論として濁して思索したことにするのだ。「この超越論的主観性は、人格の形態、人格的意識の形態、主観性の同一性の形態を守り、超越論的なものを経験的なものの特徴から転写して自己満足する[ドゥルーズ, 2007, p.179]」。こうして《私》が感じる身体性から「触れること」を問う行為は、あらゆるものを経験的な次元へと還元し、少しの変化しかならない《私》の主観性へと引き込み、「問い」そのものが《私》の願望へと変わる。ここに

あるのは触覚における偽の問いであり、偽の他者性である。偽の問いと他者性に抵抗するためには、情報化社会のテクノロジーによって生じてきた問いに触れて向き合うしかない。

3. テクノロジーの問い—延長する思考—

テクノロジーの発展は時に想像もつかなかった問いを提起してしまうことがある。例えば、脳死と臓器移植の問題である。「1950年代の人工呼吸器の開発・普及によって、脳は死んでいるが、身体の他の部分が生きている『不可逆的昏睡』という特殊な状態が生まれた。[「脳死と臓器移植」, p.48]」脳の心肺機能制御能力が喪失したならば、それまでは亡くなるしかなかったが、自発呼吸ができなくても人工呼吸器によって呼吸が維持されるのである。そうすると、心臓の機能もまた維持される。ただし、植物状態とは異なり脳の機能が回復することはない。それに対して、1960年代から臓器移植の技術が上がっていったが、死体からの移植は成功率が低く、生体からの移植には侵襲するため問題がある。「心臓停止していないドナーから心臓を摘出することは、殺人になる。しかし、心臓停止していない状態を人の死として判定できれば、殺人にならずに、心臓を摘出して移植することができる。つまり、『脳死』という概念は、臓器移植のためにつくられたものともいえる。[同上]」こうして、テクノロジーは死の定義すら変えてしまう問いを人類に提起したのである。さらに、問いはそれだけではない。数か国で取られている「オプティングアウト」は、生前に明確に拒否の意思表示をしておかなければ自動的に臓器提供するとみなす制度である。臓器は自分が生きていくためにあるはずなのだが、このような制度はどこか臓器がそもそも社会の共有物であるかのような印象を与えてしまう。人間の臓器、身体の一部は社会の共同体において共有されることになったのだ。

フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーは50歳で心筋梗塞の発作にみまわれ、その翌年心臓の臓器移植を受けた。彼の経験で語られるのは、臓器提供と移植手術は簡単なことではないということである。

侵入者というのはむりやり押し入ってくる。不意にか、あるいは策を弄してか。…よそ者がやって来るときに、あらゆる侵入を排除しようとするのは、論理的にも受け容れがたく、また倫理的にも認め得ない[ナンシー, 2000年, pp.4-5]。

ナンシーは自身の臓器移植体験を国境の問題や、アイデンティティの問題と平行して考えていく。国境の場合は、審査があり、自分たちに害がなく、似たようなものだけが入ることができる。本当のよそ者、他者は門前払いをされるのだ。しなしながら、社会の中ではなぜか侵入者としてその他者が発見されることがある（不法移民など）。ナンシーは、「私の心臓が私にとってよそ者になろうとしていた。それが内部にあるからこそ、まさによそ者なのだ。よそ者というのは、まずは内部に出現したからこそ、外からやってくることになる[同書, p.12]」として、自分の命を守ってくれるはずの心臓が自分の命を脅かし、突然自分自身にとって異物や他者になったことを発見する。

そこで心臓の移植手術をしなければならぬのだが、そこには大きな問題がある。人間の人体はその人だけのものではなく、細菌、ウイルス、ミトコンドリアなど、身体はさまざまな微小な生物・無生物の力を借りてなりたっている。身体はすでにさまざまなものと共有される場なのである。しかしながら、それらには自己にとって味方となるもの、そして、自己にとって敵となるものがあり、身体の中では免疫系によって区別がつけられている。身体の中である意味では「自己」と「非自己」が区別されており、病原体に対しては攻撃が加えられ「自己」が守られることになるのだ。臓器移植ではこの免疫系が問題となる。

すぐに、よそ者としての他者が顕在化してくる。…免疫学的な他者、置き換えられないのに置き換えられてしまった他者だ。その他者の顕在化が「拒否反応」と呼ばれる。わたしの免疫システムが他者のそれを拒否するのだ（ということは、「わたし」には二つのシステム、二つの免疫上のアイデンティティがあるということだ）[同書, p.27]。

したがって、ここでは何が《私》なのかという問題が浮上してくる（ナンシーはこの《私》を「シフター（転位語／転換子）[shifter]」と結びつける[同書 p.7]）。異物になってしまった心臓から自分を守るためには、他者の心臓を移植しないとイケないのだが、その心臓を免疫系は侵入者とみなして拒絶してしまう。身体は「自己」と「非自己」の区別を守ろうとするのだが、《私》が《私》であること、自分のアイデンティティを守ろうとすればするほど自分の命を危険に曝すことになってしまう。この時、一番の侵入者や他者はある意味で

はこの《私》であり、この問題を片づけるためには免疫抑制剤を用いるしかないのだ。

しかしながら、免疫を抑制してしまえば当然のように、身体の中で自己と非自己の区別がなくなることになってしまう。ナンシーは昔から免疫系に隠れて存在していた帯状ヘルペスのウイルス、サイトメガロウイルス等に苦しむことになる。さらに、免疫力の低下で、悪性リンパ腫をわずらい、化学療法や放射線治療をして、最後に幹細胞の自己移植をしたのだ[同書, pp.34-36]。こうして、また免疫系の《私》が復活することになる。臓器移植の体験においては、《私》のアイデンティティが揺らぎ、《私》こそが一番の他者となってしまう、その他者になった《私》と自己の境界で触れ合いつつも、身体はさまざまなものが共存する場になってしまったのだ。このあり方をナンシーは、『共同一体』において以下のように述べている。

自己においてあなたを触ること、またあるいは、同じことだが、自己において皮膚を触ること、これこそ、身体が常により遠くへと、常に余りにも遠くへと強制する思考である。実際、そこで強制され、そこで解体されるのは思考それ自体である。何故なら、思考(pensée)—それ自体が一つの重さであること(pesée)なのだが—のすべての重み、すべての重力は最終的には諸身体への同意=共に感じることを以外の何ものにも赴きはしない。[ナンシー, 1999年, pp.30-31]

通常は、《私》が何かについて考える。あるいは、《私》が自己の身体について考える。しかしながら、心臓移植の体験においては、《私》が他者となり、複数の境界が同時に触れあっている場になってしまう（「複数にして単数の存在[Être singulier pluriel]」）。それは、身体の中この場こそが思考をもたらすのであり、《私》の思考には（デカルト的に言えば精神なので延長せず）重さがないが、身体がもたらす思考には延長があり重さがあることになる（脳が意識をもたらすという主張もあるが、「脳が意識をもたらす、その脳を意識する」という悪循環にしかならず、デカルト的に言えばそんなものは思考ではない）。また、触覚についても同じであり、通常は、《私》が何かに触れる。あるいは、《私》が自分と他人を隔てている皮膚に触れるのであり、その人の《私》自身に触れる訳ではない。それに対して、「自己において皮膚を触ること」は、他者に

なってしまう隔たりのある《私》と、自分でありつつもその境界に触れることである。

しかしながら、テクノロジーの発展はこの「複数の境界が同時に触れあっている場」の問題を、さらなる問いとして提起する。近年、研究が進んでいるキメラ技術は動物に人間の臓器を生産させようとする試みである。遺伝子操作を行って特定の臓器をつくれないようにしたブタ胚に、臓器を待つ患者のヒト iPS 細胞を注入し、それを雌ブタの子宮に移植して出産させると、理論的には患者の遺伝子で臓器が作られるので、必要な臓器を体内に持つブタが生まれるだろう。そして、後はブタから臓器を摘出し、患者に移植するのである。たしかに、このような技術があれば効率よく臓器を生産できるのであり、最大のメリットは患者自身の遺伝子で作られた臓器なので、免疫系の拒絶反応が無いことである。しかしながら、ここには重大な倫理的問題があり、人間の都合で人間と豚の中間の生き物、人-ブタのハイブリッドというこれまで存在しなかった生物がこの世に誕生することになってしまう。また、「脳死」は臓器移植のために作られた死であったが、この技術があれば用済みということになる。それならば、死の定義を戻すのだろうか。死の定義が、時代によってコロコロ変わるの危険なことではないか。

ブタは野生のイノシシを品種改良して家畜化したものであり、ブタは人間の豚肉への欲求のために存在している。そして、その臓器は初め放るもん(ホルモン)であり食べることはなかった。そして、今度は、その臓器を人間は食べるようになったのである。さらに、2022年と23年にアメリカで、患者に対してブタの臓器の移植手術が行われた。二件とも数か月しか生存できなかったが、今後はさらに生存できるようになるかもしれない。そして、キメラ技術によってブタは人間の臓器を生産するようになり、臓器を媒介としてブタの体内で人間と共存し、人間の体内でブタと共存するようになるかもしれない。このような事態をカナダの情報学者ピエール・レヴィは以下のように述べている。

身体の変換は彷徨とあらゆる交流を引き起こす。〔臓器〕移植は人間の身体の間で器官の巨大な循環を組織する。一ある個人から別の個人へ、あるいはまた死者と生者の間で。人間の間で、あるいは同じくある種から別の種へと。人々にヒトの心臓、豚の肝臓を移植したり、バクテリアから作られたホルモンを摂取させたりするのである。インプラントや人工器官は無機物と生物の間の境界をかき乱

す。…私たちは、今日では同じ技術的、医療的ネットワークに参加している人々と、ヴァーチャルな形で結合された身体において結びついている。それぞれの個人的身体は雑種で世界化された巨大なハイパー身体[hypercorps]の当事者となっているのである。地球上のデジタルネットワークによって…人類のハイパー身体は、表皮の間、種の間で、国境や海を超えながら生命の流れの一つの河岸から別の河岸へと、キメラ的なその組織を広げているのである[レヴィ, pp.24-26]。

このような集約的な身体は宗教的儀式の象徴であり、聖餐ではパンとワインがキリストの体と血に変化しそれを信徒が分け合う。しかしながら、人間の身体は、人間たちの中で、さまざまな動物、微生物、無機物などと共有される場へとデジタルネットワークによって変化していくのだ。テクノロジーの発展は「複数の境界が同時に触れあっている場」をここまで発展させたのであり、それはナンシーが言うように新たな触覚によって存在者たちの境界が触れ合う共同体である。

4. 出来事としての触覚一準 - 超越論的なもの一

人間における経験の条件を問う超越論哲学を創始したカントは、思考することを重視し、感性という身体が外的なものに触発される能力を劣ったものとした。それに対して、そもそも人間における感覚の条件はすべて距離がないこと、つまり「触覚」が五感を陰で支えているのであった。メルロ＝ポンティは触れることについて「肉」と「交叉交換」から超越論的に問うたが、それは結局のところ、経験的なものへと超越論的なものを還元してしまい、具体的に説明すらできない「中間的なもの」の理論を後継者に生み出させた。それに対して、ナンシーは臓器移植の体験から身体を超越論的に問い、身体が「複数の境界が同時に触れあっている場」であることをその身によって経験し、身体において無数の境界が触れ合う思考が生成することを明らかにした。ナンシーは情報化社会におけるデジタルネットワークにおいて、人間の体内においてあらゆる境界が入り交じり、その境界が新たな触覚による共同体になることが現代における経験の条件だと突き止めたのである（「超越論的经验論」）。それはテクノロジーの発展がもたらした問いであった。

ところで、テクノロジーの発展によってメディアが変化し、そのメディアの変化こそが人間の感覚比率を変えてしまうと主張したのがマーシャル・マクルーハ

ンであった。マクルーハンはメディアが送ってくる情報の「内容」を分析するのではなく、メディアの「形式」が人間における経験の条件を変えてしまうことを超越論的に問うたのである（「メディアはメッセージである」、つまり、メディアの「形式」こそが人間を問うための情報となる）。こうして、「メディア[medium]」はただの「中間的なもの」ではなく、具体的に経験可能で思考可能な条件になる。例えば、太古においては話し言葉こそがメディアであり、人間にとって聴覚が最も重要であった。それに対して、文字というメディアが生まれ書き言葉ができ、視覚の方が優位になった。しかしながら、ラジオはMCの言うことを一方的に集中して聞くという聴覚の変化をもたらした。そして、最後にテレビは映像と音声がありそれらを視聴者が自由に探索して視聴するという自由な諸感覚をもたらしたとマクルーハンはする。こうして、メディアの変化はそのまま人間における経験の条件の変化となる（「メディアはマッサージである」、メディアの変化によって人間の感覚比率も変わる）。

テレビによって拡張されるのは、触覚という能動的で探索的な感覚である。触覚は、視覚というひとつの感覚だけではなく、すべての感覚を同時に関与させる[マクルーハン, p.127]。

電子メディアの発展によって、リアルタイムで人間は世界中の人々とのコミュニケーションが可能となり、まさに距離が0となったのである。前述したように、「触覚」がすべての感覚を陰で支えているというのは正しいのだが、電子メディアは本当に人と人との距離を無くしたのであるか。

束縛の手段、そして、分類の手段として空間を囲い込むという観念全体が、今日の電子的世界においては、かつてのようによく機能しない。…現代とは、すべてが同時に生起するようなまったく新しい世界である。『時間』はとまり、『空間』は消え去った。われわれはいま、グローバル・ヴィレッジに住んでいる[マクルーハン, pp.63-65]。

マクルーハンは電子メディアによる、世界が優しい一つの村になるという地球村[Global village]の存在を予言したが、残念ながらそうはならなかった。SNSではブロック機能や、おススメ機能があり、自分の見たいもの、聞きたいものしか触れることができないからだ。また、そこには政治的意見や社会的関心による壁があ

り、お互いをブロックしあい、意見が異なる人々の間ではコミュニケーションなど成立し得ない状況になっている。このようなメディアとテクノロジーがもたらした新たな問いにどう向き合えばよいのであろうか。

マクルーハンは「『時間』はとまり、『空間』は消え去った」としたが、SNSではそれぞれ交わることなく平行したリアルタイムの時間があり、空間もミュートや鍵アカウントによって隔離されている。この閉鎖や隔離された時間と空間の問題をどうすればよいのであろうか。ここで鍵となるのが、ナンシーが言及していた「シフター（転位語／転換子）」である。「シフター」とは状況や文脈が特定されない限り何を指すのかわからない語である。たとえば、《私》、《あなた》、《今日》、《いま》、《あれ》などであり、その語が何を指すのか情報がないと混乱してしまう。かつての文字や印刷技術というメディアは、SNSの問題に対して「『時間』はとまり、『空間』は消え去った」という思考の別のヒントをもたらすだろう。それは、著者の《私》と読者の《私》との関係である。閉鎖や隔離されたSNSの時間と空間にある《私》たちの関係は、共感、同情、共振するなどの身体的な感情による関係性である。しかしながら、古典などを読み解くときには、読者は何度も努力を重ねてこれまでの自分を乗り越えて、新たな読み方ができる新しい《私》になろうとする。そして、著者の《私》もまた読者が提示した新たな解釈によって別の側面を垣間見せるのである。

この時、時間と空間を越えて、文字と印刷技術というメディアと《私》という「シフター」を介して、読者の《私》と著者の《私》は触れ合う。これはまさに、「自己において触れること」、「自己において皮膚を触ること」であり、他者になってしまい時間と空間で隔たりのある《私》と、自分でありつつもその境界に触れることである。それは、さまざまな時代と地域における経験の条件を乗り越えていく、つまり、超越論的なものを変えつつも生じる変異であろう。

これはあり得なかったことが起きるまさに「出来事[événement]」であり、それは《私》がたどり着けぬままにいつの間にか起こっており、変化をもたらした痕跡だけが残されたものである（「差延[différance]」）。文字と印刷技術というメディアにはこうした重大な変化をもたらす他者性を秘めた、たどり着けない絶対的他者としての出来事をもたらすことがある。それならば、同じようなことが電子メディアやSNSにおいては起こらないのだろうか。これをデリダは、「触覚的なものの存在論的な準-超越論性[デリダ, p.534]」と呼ぶ。

この触覚（触れることではなく）の準—超—超越論的存在化は、逆説的なものであり続けるはずである。それは、記入されたり書かれたりする代わりに、外記される。というのも、そこで触れられるもの、あるいは触れることの名のもとに語られるものは、触知不可能なものであるからだ[デリダ, pp.552-553]。

例えば、互いにミュートしブロックし合っている、SNSのリベラルなアカウントと保守的なアカウントの集団たちがあるとす。集団どうしは時間と空間において閉鎖や隔離をされており、どこまでも平行したリアルタイムの時間と空間しかない。だが、現実社会において事件（出来事）が起こると、たがいの発言を確認し合い、「反日だ!」「ネトウヨだ!」と叫び合い、たがいに距離が無くなり触れ合ってしまうのである。

このことは日本で起きたキャンセル・カルチャー事件においてもいえる。主に 2022 年に起きたこの事件は、SNS の鍵アカウントにおいて歴史学者がつぶやいた揶揄が、その鍵アカウントのフォロアーによって拡散され、相手の英文学者に届いて生じた事件（出来事）である。揶揄の行為は、ジェンダー的な差別だと見なされ、「オープンレター」が公開されることになったが、ここでは経験的なことを問うのが目的ではないので置いておく。問題なのは SNS において空間と時間が乗り越えられてしまったことである。空間的には一方は SNS において鍵アカウントであり、相手方も対立意見にミュートをしていた。しかしながら、両者のフォロアーによってその壁は乗り越えられて、距離が無くなってしまった。さらに、問題なのは時間である。歴史学者の揶揄という言葉行為は、時が経って彼の《私》から離れて別のものへ変化し、それは差別的行為の行為遂行と見なされた。こうして「外から刻まれ[ex-criture]」、彼の《私》は差別主義者とされたのである。

こうして、SNS における時間と空間を通して、歴史学者と英文学者は距離が無くなり、重大な変化としての事件（出来事）が生じてしまったのだ。とくに、歴史学者に対する見方は変化し、キャンセルされる別の《私》になってしまう。これまでと同じ自分であったのに、社会からは認められない別の《私》と触れ合わなければいけない。デリダが「準—超越論的なもの[[quasi-transcendental]]」という時、それは、超越論的なものを変化させつつ、新たな経験的なものを生じさせる「差延」された他者としての「出来事」を意味する。SNS の経験の条件である「時間と空間において閉鎖や

隔離をされており、どこまでも平行したリアルタイムの時間と空間」を変化させ、過去の発言が経験的な《私》を変えてしまう行為遂行となる「出来事」。例えば、ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』において有名な「銀の燭台」のエピソードもそうである。主人公のジャン・ヴァルジャンは軽い罪にも関わらず長期にわたって服役し、人間不信になっていた。そんな彼を、ミリエル司教は暖かく迎え入れたが、司教が大切にしていた銀食器をヴァルジャンは盗んでしまう。彼は警察に捕まり司教のところ突き出されるが、司教は「それは私がこの人に贈り物としてさしあげたものです」と言った。そして、司教はヴァルジャンにしてもいない約束を守るように迫る（＝行為の遂行：「忘れないでください、決して忘れないでください、この銀器を使って真人間になるのだと、あなたが私に約束したことを」。）デリダは「贈与は不可能なもの」とするが、その意味は贈与の行為は経験的なものではなく、超越論的なものさえも変化させるということだ。**贈与は、交換とは異なり勝手に生じる**。司教がヴァルジャンにふいに与えたものは銀器ではなく、彼が生まれてから知らなかった変化する能力であって、それは経験の条件である空間と時間を越えて機能していく。同じように、歴史学者に与えられたものは SNS による変化する能力であり、実際に彼は謝罪して別の《私》になっている。我々が向き合うべきなのは、他人に変化をつねに要求するもう片方にはこの変化する能力すら与えられてないことである。その方への贈与もまたいつか、メディアの超越論的なもの（経験の条件）さえも変化させる、「準—超越論的」な変異によるだろう。

文 献

- ジル・ドゥルーズ、『カントの批判哲学』、國分功一郎訳、河出文庫、2008 年。
源河亨、『「美味しい」とは何か』、中公新書、2022 年。
モーリス・メルロー＝ポンティ、『見えるものと見えないもの』、滝浦・木田訳、みすず書房、1989 年。
伊藤亜紗、『手の倫理』、講談社、2023 年。
ジル・ドゥルーズ、『意味の論理学』、小泉義之訳、河出文庫、2007 年。
「脳死と臓器移植」、『テーマで読み解く 生命倫理』、小泉博明他編著、教育出版、2016 年、pp.48-51。
ジャン＝リュック・ナンシー、『侵入者』、西谷修訳編、以文社、2000 年。
ジャン＝リュック・ナンシー、『共同一体(コルプス)』、大西雅一郎訳、松籟社、1999 年。
ピエール・レヴィ、『ヴァーチャルとは何か?』、米山優監訳、昭和堂、2006 年。
マーシャル・マクルーハン、『メディアはマッサージである』、門林岳史訳、河出文庫、2015 年。
ジャック・デリダ、『触覚 ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』、松葉・榊原ほか訳、青土社、2006 年。